

# ドコカへ行こうよ

サトウサ

1970 (28)

1970 (28)

1. 1970

IMMEDIATE CONTINUOUS  
HOLDER OF THIS PASSPORT BEING  
TRANSIT WITHOUT A VISA MUST LEAVE  
WITHIN 72 HOURS FROM THE TIME OF

SIGNED

21/8

05 SEP 1970

AT 0 CLOCK  
BANGKOK AIRPORT THANA TO

07 SEP 1970

# ドコカへ行こうよ

## サトウサンペイ

1970 (28)

3.1. AYT. 1970  
21 E120 Δ 02.21

IMMIGRATION OFFICER  
★ (379) ★  
16 AUG 1970  
LONDON AIRPORT

16 AUG 1970

IMMIGRATION OFFICER  
★ (379) ★  
16 AUG 1970  
GLASGOW

11 AUG 1970

11 AUG 1970

(署名) 入国審査官

## 著者略歴

昭和4年名古屋に生まれ、大阪で育つ。昭和25年京都工業専門学校(現京都工芸繊維大)色染科を卒業、大丸デパート宣伝部に勤務。新聞広告制作のかたわら漫画を描き始め、昭和32年に同社を退職し漫画家として独立。昭和41年「アサカゼ君」「フジ三太郎」で第12回文藝春秋漫画賞を受賞。本名佐藤幸一。

## ドコカへ行こうよ

昭和四十七年十二月十日第一刷

定価 六〇〇円

著者 サトウサンペイ

発行者 榎 原 雅 春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三番地  
電話 東京 (二六五) 一一二一

郵便番号 一〇二

印刷所 凸版印刷

製本所 大口製本

\*万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

## 裸の旅へ

もう、ひと昔前になるが、『旅情』という映画が封切られた。キャサリン・ヘップバーン扮するアメリカのOLが、旅先でイタリアの中年男性と恋をする……。ちょっと盛りを過ぎたOLのアバンチュールを描いた映画であった。ぼくはそれを見たとき、アメリカは女の子のサラリーでも海外旅行ができるのかと、羨ましく思った。

それから何年かたち、ぜったい行けやしないと思いついていた海外旅行に、ぼくも行けるようになり、今ではもう、日本の若いOLたちもドンドン行くようになった。

あの映画のころのアメリカが、そうであったように、旅行といえどもOLがワッと押しかける。いつまでも行けないのは、男のサラリーマンとその奥さんである。夏はたいはい一週間の休みがあり、有給休暇も一年間にはずいぶんたまる。それなのに男のサラリー

マンは、なかなか腰を上げない。

外国へ行ってみると、まず目立つのは、中小企業のオヤジさん、医者、ジイさん、バアさん、OL、そして、学生である。

男のサラリーマンはさびしからずや。会社における責任が重いのであろうか、それとも一家を背負って、肩の荷が重いのであろうか。お金のほうは、アメリカほどではないにしても、ボーナスの二、三回分ぐらいからはじき出せば、「ドコカ」へは行けるはずである。バーでぐだぐだ酒を飲んでるよりはいい。

ぼくも最初は、「勉強をして、自分の容器を大きくしてからでないと、多くを吸収できないから……」とまじめに考えていた。しかし、そんなことをいつていたら、重い腰がますます重くなる。そんなふうに考えるよりも、「感受性の敏感なうちに、外国を吸いにとってこよう。年をとるに従って鈍くなるから」と、考えるべきではないか。外国へ行くのに勉強はいらない。外国へ行くのに用意はいらない。ノートも本もカメラもテープも捨てていこう。すなおな裸の心に映ったもの、それが収獲だとぼくは思う。

外国に行っていちばんいいことは、日本が見られるということである。風景などは、絵ハガキや映画で見られるが、日本を外から見ることだけは、行かなきゃできないのである。日本とは自分自身のことでもある。

少年老い易く、学なり難し、今のうちに「ドコカへ行こうよ」

## 目次

|                |     |
|----------------|-----|
| はじめての海外旅行      | 7   |
| マーガレット王女のパーティー | 33  |
| スイス・スカタン道中記    | 53  |
| 漫画集団とヨーロッパ     | 67  |
| 南欧スケッチの船旅      | 85  |
| OLの沖繩旅行拝見      | 115 |
| オーストラリアへ大名旅行   | 131 |
| 台湾・食べ歩き旅行      | 147 |
| 走りまわったニューヨーク   | 177 |
| 韓国、三泊四日        | 191 |
| 裸の旅            | 209 |
| 旅のつれづれ         | 243 |
| マンガ便利メモ        | 259 |

装幀 藤本雅也

ド  
コ  
カ  
へ  
行  
こ  
う  
よ





## はじめての海外旅行

トウトウ、キチャッタワ！

英語もダメだった。地理も歴史もダメだった。それに寂しがり。そういうぼくが選んだのは、やはりジャルパックであった。ロンドンやパリやニューヨークなど、欧米の有名都市を大勢の日本人と一緒に飛びまわる。それなら、ま、なんとかなるさ。

初めは、外国へ出かけるような人は、進取の気性に富んだカッコイイ人ばかりだろうと思っていたが、その夜、羽田に集まったのはほとんどが地方のおジイサンやおバアサンであった。どうみても頼りになりそうもない。へたをすると、こちらが頼られそうだった。

ぼくは、映画の主人公みたいに、トレンチコートのエリをたて、なれた足取りで一人さ

っそうと国際線のゲートに入って行くつもりであったが、ワンサと詰めかけた彼らの見送りの渦に巻き込まれ、バンザイを三唱され、はとバスのお上りさんよろしく記念写真をとられ、ソロソロと飛行機に乗り込んでしまった。

総勢二十三人のなかで、二十代はたったの三人。一人は外国系の雑誌社につとめている青白いインテリ君。商売柄、英語もちょっとできる。次はグラフィックデザイナーの生真面目君。もう一人は、これが大変なトラブルメーカー（珍事件起こし）だったのだが、埼玉でガソリンスタンドを経営しているとかいう赤シャツ君。色の黒いズングリした青年で、黒いダブダブの服の下にどういわけかいつも赤シャツを着こんでいた。英語はまったくダメ。

さて、緯度の関係で、明るくなったり、暗くなったりする北極回り、生まれて初めての外国、ロンドンには早朝に着いた。浅い眠りしかとれなかったのでみんな寝不足である。空港からバスでホテルに連れていかれ、ロビーの片すみにヨイショと荷物をおろす。しかし部屋へはまだ入れてくれない。

一行を引率するコンダクター（添乗員）のHさんが半分眠っているばかりに説明をする。「ホテルのチェック・インはどこでも午前十一時か、十二時からでして、まずはこのロビーで一、二時間ばかり休憩していただいて、そのうちに観光バスがきますから、それに乗

って……」

ぼくは都会のホテルのそういう規則を知っていたから、あっさりあきらめたが、おジイサン、おバアサンは田舎の人が多い。ホテルどころか、六大都市の喫茶店にさえ入ったこともない人もいるようで、

「日本の旅館だったら、玄関わきで待たせることあんめえ」

と、第一歩からモーレッツな抗議。その騒ぎを後にして、ぼくは相部屋になる予定のデザイナー・キマジメ君を誘ってホテルの外に出た。

テレビの海外旅行のコマーシャルにOL風の女のコが出てきて、「トウトウ、キチャツタワ!」と感慨深げにツブやくのがあったが、ぼくもその朝はそんな心境だったのである。

朝霧で白っぽけたホテルの前の露地はまだ人通りがなかった。向こうの四辻のあたり、ときどき、うすれた霧のなかから、山高帽に黒い服、こうもり傘をステッキのように持つ典型的なイギリス紳士のシルエットが現われて、またすぐに消える。

### 初めて使った英語

ぶらぶら歩きながら、さっき紳士のかき消えたあたりまで行くと、そこに小さなスナックがあった。湯気にくもったガラス窓が、部屋のなかを暖かそうに見せていた。

「入ってお茶でも飲んでみようか」

ドアを押すと、客がぼくらの顔を見た。「オレいつもきてるよ、珍しくないよ、なじみだよ」と、テーブルに着き、ウエイトレスに「ツ―・カップ・オブ・ティー」といった。ぼくの使った外国での初めての記念すべき英語である。そして「トウトウ、イギリスノ紅茶ヲ飲ンジャッタワ！」とキマジメ君と顔を見合わせた。

その日、市内を観光バスで走りまわって、夕方ホテルにもどった。ぼくは朝日新聞のロンドン支局に、ちょっと用があったので、ホテルの部屋から電話をかけた。英語の電話はこれまた生まれて初めてである。

「ア、ア、アイ・ウォント・コール・ミスター……」

と、東京本社で紹介された特派員の名前をいいかけると、

「アー、サンベイさんですね。こっちへきませんか、今夜軽くメシでも食いましょう」

と、日本語が返ってきた。どうして名前もいわないのにわかるのか、チクショウ！ 英語のダメなのがそちらへ行くという連絡が東京からあったに違いない。

シャワーを浴びてから、新しいワイシャツに着替え、ドレッシ―なダーク・スーツ（ドブネズミともいうが）を着た。なにしろ、英京ロンドンでディナー（晚餐）をとるのである。

その黒っぽい服にホテル備えつけのブラシをかけ、白い胸のハンカチを、五センチも外に出し、左手の親指だけを、ちょっとポケットにかけ、足取り軽くホテルの玄関を出た。

「ヘイ、タキシ―！」

と、指を鳴らした。すべて外国映画の影響である。止まったタクシ―のドアを、ホテルの金モールをつけたボーイがあけてくれる。大きな箱型の黒い自動車、なかは運転席との間にガラスの仕切りが完全にしており、くり抜いた小窓をあけて、しゃべれるようになっていた。朝日新聞の支局はロンドン・タイムズビルのなかにあり、場所はブラック・フライヤーズという駅の前。

「フ、フ、フロント・オブ・ブ、ブ、ブラック・フライヤーズ・ステーション」

といったら、「ハァーン?!」と大声で聞き返した。振り向いた運転手の顔を見ると、立派なカイゼルひげをピンとはやした老紳士。

ぼくはすみやかに自信を失った。二、三回いろいろと発音を変えていってみたが、相手は落着きはらって「ハァーン?!」である。仕方がないので、

「ロンドン・タイムズのあるとこやんか、カンのにぶい奴」

と大阪弁でつぶやいたら、これが通じたのである。ロンドン・タイムズという英語の部分が通じたのである。

「オーライ！」

車が走り出してから、どの旅行案内にも書いてある「ドアボーイにチップをやること」を忘れていたのに気がつく。

ロンドンのタクシーはゆったりしている。シートのほかに二つ補助席がついていて、その気になれば客席だけで五、六人は乗れるのじゃないか。補助席に坐ったらどんな感じであるうか。さっそくボタンボタンと二つたおして、そちらのほうにも坐ってみた。運転席のカイゼルひげが何をウロチョロしてるのかとうしろ振り向く。

ぼくはバツが悪くなって、初めの席にもどり空港で買った葉巻に火をつけた。何しろ、これから晚餐会に行くのである。葉巻でもくゆらしながら、もっと悠然としていなければどちらが運転手かわからなくなるじゃないか。

「葉巻をくわえながら、暮れ始めたロンドンの街を眺めやる。

今はストランド通り、今はフリート通り、灯のともった店、店、店。

行き交う群衆、ネオンに光る車、車、車。

劇場の前の道をスソをひるがえして横切る夜会服の婦人。

コベント・ガーデン、古本屋で本を値切っているのだろうか。

山高帽がいい、コーヒー店がいい、パブでビールを飲んでる鳥打帽の労働者がいい。

お菓子屋さん、銀細工屋さん、赤い二階建てのバスがいい。青白い街灯がいい。枯葉の歩道がいい。マンホールから湯気が立っているところがいい。

多くの罪惡を蓄えたオー！ ロンドンよ——」

と、ちょっと英文学者チャールズ・ラムさんの文体（福原麟太郎訳）を借りて、暮れなず





むロンドンの街を紹介しておく。

その晩は、支局長が魚料理店でご馳走してくれた。イギリス料理はまずいというが、北海のシャケやドーバーのヒラメなど海洋国だけあって魚はうまい。たっぷりご馳走になったあと、立ちながら飲むバー「パブ」に行く。

パブはイギリス中、どこにでもあるらしい。構えもみな同じで、入口が二つあり、右側が労働者の飲むところ、左側はサルーン（居間）といって、ホワイトカラーがたむろしている。別にどっちへ行ってもかまわないわけだが、ぼくらは労働者のほうへ入った。バーカウンターが馬蹄型になっていて、サルーンのほうも見通せる。なるほど、ホワイトカラーのほうがちょっと顔が上品である。民主主義の国なのに、えらい分け方があるものだなと、エールとかいうビールを飲みながら、イギリスの重々しい社会的な階級制度を労働者の側から論じ合った。

しかし、ぼくでも彼らの顔をみていると、あ、これは労働者の顔だ、あ、これはエリートのような顔だ、というのがはつきりわかるのである。

女は美人に生まれるのとブスに生まれるのではえらい違いだ、などというが、イギリスでは男でもそれがいえそうである。

お金はビールと引きかえに、一ぱいごとに払う。そして、一割ぐらいのチップを払うのである。